CGER-I007-'93

第3回地球環境研究者交流会議
報告書

＜地球環境国際共同研究の現状と今後のあり方＞
ーアジア太平洋地域においてー

1993年3月

Center for Global Environmental Research

環境庁　国立環境研究所　地球環境研究センター

報告書の出版にあたって

地球環境研究センターは発足以来約２年半余りを迎え、本来目的とする業務に関する取り組みもようやく軌道に乗って参りました。

当センターは、昨今の地球環境問題への取り組みという大きな流れの中で、地球環境保全にかかる研究をインターディシプリナリーな観点から推進すべく設立されたものであります。具体的には、①地球環境研究の総合化、②地球環境研究支援、③地球環境モニタリングを３本の柱として業務を進めており、昨年１１月末に開催されました「第３回地球環境研究者交流会議 Global Environment - Tsukuba 1992 - 」も地球環境研究の総合化及び支援の一環として、研究者間のより一層の情報交換等を図ることを目的としたものであります。

今回の会議では、地球環境国際共同研究をテーマとし、基調講演の後、午前中には関連各省庁からの国際共同研究に関する報告、午後からはこのテーマに関するパネルディスカッションが行われ、約１６０名の研究者らが一堂に会し活発な議論と情報交換がなされました。

今般、この会議における内容を多くの研究者の方々に知っていただき、皆様の今後の研究の御参考に供するため、会議当日の予稿集に加え議事録形式の報告書を出版することと致しました。当センターと致しましては、今後ともこのような会議を積極的に開催していくことを考えており、さらにその成果についても広く国内外に周知していくことを考えております。本報告書についてもこのような趣旨を反映するものとして位置づけていることから、地球環境研究に携わる多くの研究者に御参考いただければ幸いです。

また、御講演及び討論に参加していただいた研究者の皆様には、心からのお礼を申し上げます。

平成５年３月

環境庁国立環境研究所地球環境研究センター
センター長　　鈴木継美

目次

あいさつ　国立環境研究所地球環境研究センター長　鈴木　継美 --------- 1

＜基調講演＞
「国際共同研究の理念、方針による類型化と今後のあるべき方向についての提言」
中部大学　国際関係学部教授　樋口　敬二 --------- 3

＜関連各省庁行政官より報告＞
「地球環境国際共同研究に関する進捗状況及び組織体制の現状について」 --------- 15

文　部　省
通商産業省　（工業技術院地球環境産業技術企画官　本城　薫）
農林水産省　（農林水産技術会議事務局研究開発官　井上　隆弘）
建　設　省　（大臣官房技術調査室調査官　村上　真幸）
運　輸　省　（運輸政策局環境・海洋課地球環境保全企画官　松原　廣司）
郵　政　省　（通信政策局技術開発推進課地球環境対策室長　吉田　昇）
科学技術庁　（研究開発局地球科学技術推進室長　和田　智明）
環　境　庁　（地球環境部研究調査室長　小野川和延）

パネルディスカッション【Ⅰ】
「地球環境国際共同研究の現状と課題について」 --------- 53
司会：　国立環境研究所地球環境研究センター
総括研究管理官　西岡　秀三

＜パネラー＞
北海道大学　名誉教授　井上　力太
筑波大学　助教授　岩崎　駿介
滋賀県琵琶湖研究所　所長　吉良　竜夫
ザイール国立キンシャサ大学　教授　サンガ・ンゴイ・カザディ
国連大学　学術審議官　ロー・フー・チェン

パネルディスカッション【Ⅱ】
「地球環境国際共同研究の今後の進め方とその手段」 --------- 73
司会：　国立環境研究所地球環境研究センター長
鈴木　継美

＜パネラー＞
(社)経済団体連合会　産業政策部　部長　市川　博也
環境庁　企画調整局地球環境部　部長　加藤　三郎
国際協力事業団　国際協力専門員　城殿　博
ザイール国立キンシャサ大学　教授　サンガ・ンゴイ・カザディ
北海道大学　教授　角皆　静男

あいさつ

国立環境研究所地球環境研究センター長　鈴木　継美

おはようございます。地球環境研究センターのセンター長を務めている鈴木でございます。本日は、ご多用中ご参集いただきましてありがとうございました。

きょうで第３回の地球環境研究者交流会議ということになりますが、この研究所の地球環境研究センターは、国の中、あるいは国際的な地球環境研究を推進するための縁の下の力持ちみたいな仕事をしようということでつくられている組織です。そこが主催して毎年１度、ちょうどこの時期に地球環境研究にご関心のある方、あるいは実際に進めていらっしゃる方にお集まりいただいて情報の交換や討論を行う場を設けてきたわけですが、今年はこれまでとちょっと違う局面があります。

ご承知のとおり、リオデジャネイロでＵＮＣＥＤがあり、ＵＮＣＥＤにお出かけになった近藤次郎先生や環境庁の小野川さんなどにも来ていただいて、研究所として一遍お話を伺ったことがあります。いろいろなことが出てきたわけですが、ＵＮＣＥＤが我々に明らかにしてくれたことの一つとして、私が非常に気になっていることがあります。それは、地球は確かに１つですけれども、地球がたくさんの国に分かれていて、ネイションのレベルでいろいろな問題の解き方が非常に難しい。しかも、たくさんのネイションズがいわゆるindustrialized countryとdeveloping countryに分かれて、南北問題と言われているような問題の難しさを持っている。あるいは南北問題も実はその中にも含まれている等々、地球規模での環境の問題を考える場合に、我々が今生きている世界の構造が、解いていくのに難しい局面をつくっている。そんなことが私には非常に気になっているわけです。

いずれにしても、地球環境の研究を進め、対策を展開していこうということになると、いわゆる先進諸国の人々の考え方だけでなしに、途上国の方々とも一緒に仕事をしていかなければならないことは明らかですし、実はそれぞれがそれぞれの固有の問題を持っているわけで、そういう問題を解くために国際的な共同研究をどう組織していったらいいか、その難しさが今一番大きな問題なのだろうと思います。

我が国なども、例えば途上国との密接な連携と積極的な参加を促すためのキャパシティー・ビルディングを求められていると言っておりますが、実は我々はよその国とつき合う、あるいは援助をするという立場に立ったときに非常に下手で、国全体の組織がなかなかスマートに動かないような問題もたくさんあるような気がします。

ですから、本日のこの地球環境研究者交流会議においては途上国を含めた国際共同研究をテーマにしていただき、その国際共同研究の現状とその問題点を浮き彫りにしていただく。今後のあるべき姿や具体化のための方策についてご議論いただきたいと考えております。

実はこの地球環境にかかわる国際的な共同研究はまさに国際的に重要視されているテーマで、我が国でもあちらこちらにご関心の方がふえているわけですけれども、あしたから２日間にわたって、日本学術会議と私どもの地球環境研究センターが共同で主催する形になり、ＩＧＢＰ（International Geosphere-Biosphere Project ）のシンポジウムが学術会議の講堂で開かれます。ここでアジア太平洋地域の研究者の方にお集まりいただいて、国際共同研究として最大

級のプログラムであるＩＧＢＰが今どんな状態になっているか、それがどう進んでいるかに関して情報交換や討論がなされる予定です。

本日のこの交流会議は、実はそれに向けて我が国の中でどのような体制づくりが進んでいるか、それを土台にして国際的な、とりわけアジア太平洋地球変動ネットワークも考えられており、ＩＧＢＰの会議の後、３日から日本政府が主催する形でアジア太平洋地球変動研究ネットワーク（ＡＰＲＯＮ）のワークショップが予定されているわけです。

いろいろな意味で、きょうの会議はその出発点にもなる非常に重要なワークショップになるだろうと考えております。本日１日だけですけれども、どうぞいろいろなことをご議論いただいて実り多い会議にしていただきたいと思います。

簡単ですが、ごあいさつにいたします。